

象潟

山田真砂年

全きを見せて丸花蜂宙に  
血液のさらさら廻り藤盛ん  
緑蔭うれし人待つこともまた樂し  
蝮草山の上までバイク音  
白藤の下に飯食ふ女かな  
躊躇燐々けふを歩きし足洗ふ  
畦塗りの午后には磧の入りをり  
畦塗りを終へて閑かな夕べくる  
味噌藏に窓のひとつや若葉冷  
土喰ふて燕は土手をひるがへる  
キウイの花いかにもキウイになりきうな  
燕の子丸裸なる路上の死  
象潟の空に鳥海山残る雪  
象潟の松籟もなき夕焼かな  
代搖機大海をゆく舟のごと  
青蛙九十九島を田が繫ぐ  
代田風銀紙はがしつつ渡る  
紫陽花に火星の色も木星も  
Jokerのこゑなく笑ふ額の花  
水底のやうや昼寝の幼稚園  
袋掛け浅間山見飽きることもなく  
豆の花茶封筒より請求書  
葭切のこゑの間近やIKEA見ゆ  
滴りを溢れんばかり手の窪に  
半夏生群れて彼の世の仏たち  
建ち並ぶ屋台や七日目の桜